

日本語学習のためのeラーニングサイトと 教師の関わり方三つのサイト開発を事例に

上田和子*
田中哲哉**
川嶋恵子***

<目次>

- | | |
|--------------------------------|--------------------------|
| 1. 背景 | 4. 「NIHONGO eな」：情報の提供と共有 |
| 2. 「日本語でケアナビ」：特定専門分野と外国語教育をむすぶ | 5. サイト開発の波及効果 |
| 3. 「アニメ・マンガの日本語」：個人利用と授業での活用 | |
-

Key Word：ウェブサイト開発、eラーニング、日本語学習、ターゲットユーザー、教師の役割

1. 背景

1.1. インターネット普及と言語教育現場の関わり

インターネットの急速な普及により、現在、世界各地でウェブを通じて外国語学習に取り組む学習者が増加している。つまり、従来の教科書や教材、そして学校等におけるカリキュラムに従って学習を進める方法とは全く異なるアプローチで、外国語に触れ楽しみ取り組んでいる学習者が急増している

* 武庫川女子大学

** 国際交流基金関西国際センター

*** 国際交流基金関西国際センター

のである。これはもはや「学習」の枠組みを超越する現象であるともいえるし、その反対に、「学習」の枠組みが大きく広がっていると見ることもできる。いずれにしても、より多くの人々がインターネットを通じて多くの外国語に関する情報を受け取り、また発信しているのが21世紀初頭の外国語学習の現状と言えるだろう。その中に日本語や日本語に関連する様々な文化現象も含まれている。その顕著な例が、日本のサブカルチャーに対する動きである。

一方で、学習者を支援する教師らからは、これらの状況にどのように対応していくべきかという不安の声さえ聞こえてきた。学習者がインターネットを通じて思い思いに得てくる関心事に対して、教師としてどのように対応すべきか、あるいは対応せずに従来型の教育を進めるべきか、という悩みである。つまり、従来の「学習」や「授業」を成立させてきている様式の価値を問いなおさざるを得ない状況が出現していると言えよう。

しかし、これら従来型の学習とインターネットを介した学習は、あながち対立軸に置かれるべきものではないのではないのか。インターネット上には現在、英語学習をはじめ日本語やその他外国語学習に関連する多様なウェブサイトが存在しており、それぞれ目的や対象者によってさまざまな工夫を施したコンテンツが提供されている。それらは果たして従来の学習を否定するものなのだろうか。

1.2 三つの事例について

本稿では、日本語教育のためのサイト開発事例を三つ紹介する。開発過程では、いずれもインターネット環境やウェブを活用して、授業や学習を活性化していくことはできないかという教師の問いかけがあった。換言すれば、新たに出現したメディアと、「どのように教師はうまくつきあっていくべきか」ということが大きなテーマとして底流に流れている。

取り上げるウェブサイトは、以下の1)~3)である。これらは国際交流基金関西国際センターの日本語学習用ウェブサイトとして開発され、筆者ら3名はそれぞれのプロジェクトに携わった。各々のサイトは、異なる対象者や目的を想定しているが、日本語学習のための無料eラーニングサイトであると

いう点では共通している。

- 1) 日本語でケアナビ <http://nihongodecarenavi.jp/>
- 2) アニメ・マンガの日本語 <http://anime-manga.jp/>
- 3) NIHONOGO eな <http://nihongo-e-na.com/>

1)は、看護や介護の分野で働く成人学習者の支援を目的とした日本語と英語・インドネシア語の辞書機能を中心としたサイトである。

2)はアニメやマンガで使われる日本語についての学習サイトで、アニメやマンガを日本語で楽しみたいという世界中の若者を対象とする。

3)はインターネット上の様々な学習サイトやツールを広く紹介することを目的とし、対象者も目的も多様である。

本稿では、以下の三つのポイントを中心にして議論を進めることとする。

- ① ターゲットユーザーの違いによる各サイトの特徴
- ② 日本語学習者が利用対象であるという共通点に関わる開発の工夫
- ③ サイト公開後の反響や対応

①では、ターゲットユーザーの利用目的や年齢などの相違が、どのようにサイトに反映されているかについて議論を深める。仕事に必要で日本語を学習する場合、自分の趣味のために日本語を知りたい場合など、利用目的の違いは、コンテンツ自体だけでなく、その提示の仕方も大きく異なるはずである。

②では、日本語を学習している人たちが利用しやすくするために、主に言語や文字の表記や表示の仕方、例えば、ひらがな、漢字、ローマ字をどのように扱うか。あるいは、入力方法に関する工夫などを中心とする。

③については、ウェブサイト開発は公開して終了ではなく、その後も運営管理というプロセスが待っており、比較的修正や変更を行いやすいというのもウェブサイトの特徴である。また、どうやって利用者に使い方などの情報を伝えていくかも大きな課題である。

2. 「日本語でケアナビ」 ：特定専門分野と外国語教育をむすぶ

2.1. 「日本語でケアナビ」の特色

「日本語でケアナビ」は、看護や介護の専門家が日本で働く時に必要なことばを集めたサイトである。本サイト開発の背景には、2004年以降、フィリピンと日本との間で、EPA協定が検討されるようになった過程で、外国からの看護・介護従事者を日本社会で受け入れる試みが始まろうとしていたことがある。それが日本語教育にも大きな波となって現れることとなった。具体的にフィリピンでは、日本での就労を目指す看護師の有資格者が、あらたに日本語を学ぼうとする動きがみられた。

そこで、国内外の日本語教育を支援するため、国際交流基金関西国際センターで、具体的な支援策の一環として学習用のウェブサイト開発がはじまったのである。同センターでは、1997年開所以来、専門職に就く成人のための日本語教育(各国外交官、公務員図書館司書など)のプログラム開発と実践を行ってきた。その経験によって、看護や介護分野の専門職のための学習支援サイト開発に取り組むこととなった。

開発過程では、まず「日本で看護師や介護士として働く一人の人物がどのような言語生活を送ることになるのか」を思い描くことから始まった。その結果得られたのは大きく分けて以下のような領域である。

- 1) 業務上のことば：専門家同士で
- 2) 業務上のことば：患者、利用者に対して
- 3) 個人として使うことば：職場の上司、同僚と
- 4) 個人として使うことば：プライベートな場面で

看護師や介護士として働くためには、当然、看護・介護の場面で用いられる基本的な専門用語が必要であるが、実際の仕事や生活はそれだけでは成り立たない。基本的な日本語表現や、特に敬語や「~あげる」「~もらう」など、人

間関係に基づいた待遇表現を駆使しなければ、実際の現場では働けない。とりわけ、看護師・介護士という職業では、患者との距離が近く、機械的、業務的ではない気持ちのこもったコミュニケーション能力が求められる。その一方で、一人のスタッフとして同僚らとの円滑なコミュニケーションを行うことや、日本に滞在して市民生活を送るうえでさまざまな表現を駆使する必要がある。

これらを考慮したうえで語彙収集を行い、「仕事で使える」「気持ちを伝える」「くらしに役立つ」という概念に分類し、辞書機能を持つウェブサイトとして提供することにした。開発過程では、常に、誰が、何のためにこのサイトを使うのか、という基本的な問いかけに対する答えを模索しながら、コンテンツ作りを行った。

一方、サイトの視覚的なデザイン性についても議論を交わした。特色は以下のとおりである。

- ・ケアの仕事に携わる人々に親しまれるよう、全体の色調や雰囲気や優しい感じにする。
- ・わかりやすく使いやすいインターフェースで提供する。
- ・機能や項目の配置がわかりやすいよう、1画面に情報を盛り込みすぎない。
- ・日本語モードとEnglishモード(後にインドネシア語モードも)で同様の内容を提供する。
- ・介護動作や用具など専門的なものは、イラストを付記して理解を促す。
- ・使い方の説明(ヘルプ)を掲載する。
- ・PC版とともに、働きながらすぐに使えように携帯版も提供する。

2.2. サイト開発における日本語教師の役割

このプロジェクトを中心的に担当したのは、ITの専門家ではなく、日本語教師らであった。我々がこだわったのは、「専門用語を覚えただけでは、仕事はできない」という点である。常に日本語学習者とともにいる教師らは、学習者の日本語力と、日本語ネイティブと話した時に起こりうる誤解について想像力を働かせることが可能である。むしろ、それが身にしみてい

る。サイト開発では、その経験を学習のポイントへの配慮として活用することが可能である。そこで、コンテンツには、「何を学ぶか」という問いへの答えとして、専門用語だけではなく、専門性発揮を可能にするために必要な、基礎的な学習項目を構成要素に取り入れた。また「どのように学ぶか」という問いは、サイト利用者(学習者)が、日本語の勉強に役に立つと感じて何度もサイトを訪問するよう工夫を凝らしている。それらは、日ごろ学習者とともに日本語を考えてきた日本語教師らの視点が活かされた側面であり、このサイトの一つの特色となっている。

3. 「アニメ・マンガの日本語」 ：個人利用と授業での活用

3.1. 情報の質にあった見せ方

日本のアニメやマンガが世界中で人気を集めていること、日本語を学習し始めるきっかけの一つとなっていることは、周知のことであろう。インターネットを介して、世界のどこにいても個人が欲しい情報にアクセスできる今日、アニメ・マンガファンは、日本国内とほとんど時差なく、自分が好きなアニメ・マンガの情報を入手し、楽しんでいる。

国際交流基金関西国際センターでは、アニメやマンガを日本語学習の動機付けとして活用するため、「アニメ・マンガの日本語」ウェブサイトを開発した。開発にあたり、アニメ・マンガ好きの日本語学習者と、彼らに教える日本語教師を対象にニーズ調査を行い、どのような情報を提供すべきかを探った。調査から明らかになったユーザー像とニーズをまとめると以下のようになる。

日常的にインターネットでアニメやマンガ作品を楽しんだり、ファン同士交流したり、情報交換したりしている。自分の気に入る作品やジャンルは、個人によって非常に細分化している。好きな作品の情報は、既に自力で得ることができ

るが、作品を日本語で楽しむための助けが欲しいと感じている。具体的には、教科書や辞書に載っていないようなアニメ・マンガに特有の表現、俗語を理解し、日本語でアニメやマンガを楽しめるようになりたいと思っている。

このようなニーズに応えるため、「アニメ・マンガの日本語」では、アニメ・マンガの中の「日本語」に注目し、海外でも人気のあるマンガ作品に現れるセリフやオノマトペを分析し、アニメ・マンガに特有の日本語表現を扱うことにした。マンガ作品の分析からは、キャラクターごとに特徴的な表現が使われていること、ジャンルごとに、よく使われるせりふ、オノマトペ、用語、漢字があるということがわかった。

当然のことながら、ウェブサイトの主要な使われ方は、学習者が自宅などからアクセスし、個人で楽しむことである。上で述べたようなユーザーが使いやすいサイトを目指し、以下のような特徴をもったサイトを制作した。

- 1) アニメ・マンガに現れる生き生きとした日本語を学べる
- 2) アニメ・マンガの世界観の中で学べる
- 3) 自分で内容や方法を選んで、クイズやゲームで楽しく学べる

アニメ風のキャラクター、マンガ、声優による音声、クイズ、ゲームなどを多用し、日本のアニメやマンガが好きで、日常的にインターネットを利用しているユーザーに好まれる見せ方となるよう、工夫している。

ウェブサイトは、様々な素材(画像、音声、色など)を使い、さまざまな形式(読み物、ゲーム、クイズなど)で情報を見せることが可能である。つまり、提示したい情報にあわせて自由に見せ方を選べるということである。個人で利用することが基本である以上、情報の種類や質に合わせ、効果的に学習できる見せ方を選ぶ必要があるだろう。「アニメ・マンガの日本語」ウェブサイトは、その具現化の一例であると言える。

3.2. 授業での活用方法

「アニメ・マンガの日本語」もそうであるように、ウェブサイトの多くは個

人での利用が想定されているが、ウェブサイトにも豊富にある画像や音声などを効果的に利用することで、授業でも活用することができる。国際交流基金関西国際センターでは、「アニメ・マンガの日本語」ウェブサイトを利用した授業を行っている。以下に筆者が行っている授業活動例を紹介する。

(1) アニメ・マンガのキャラクター表現

- ・目的：キャラクターごとの言語的な特徴を知り、生き生きとした日本語表現を楽しむ
- ・レベル：初級後半から
- ・活動：Character Expressionsコンテンツを用いて、キャラクターごとの表現を比較したり、音声をまねて、キャラクターの音声の特徴(イントネーション、スピードなど)を体験したりする。キャラクター表現の特徴がわかったら、Expressions by Sceneコンテンツのマンガを読み、絵に合わせてせりふを言ってみる、アニメ映像を用いてアフレコしてみるなどする。
- ・学習者の反応：キャラクターらしさや文脈に合わせたせりふとなるよう、声の高さやスピードを工夫したり、時にはジェスチャーを交えたりなど、音声的な表現に自然と注目していた。絵や音で具体的な表現の仕方が理解しやすく、多彩な表現につながっていたようである。

(2) オノマトペ

- ・目的：マンガに使われるオノマトペを使って、微妙に表現される日本語を楽しむ
- ・レベル：中級以上
- ・活動：基本的なオノマトペの特徴を紹介した後、Expressions by Sceneのマンガで使われているオノマトペが何を表しているか考えたり、オノマトペを消したマンガに、自由にオノマトペを入れてみたりする。また、サイトの音声を利用して、オノマトペの文字と音を比較する。
- ・学習者の反応：耳で聞いた音と日本語のオノマトペの表記が違って、すぐには何を表しているのか理解できない場合でも、マンガがあれば文脈やイラストから理解しやすいようであった。オノマトペだけを時系列にならべただけでもストーリーが想像できることから、オノマトペが果たす役割の大きさを感じてい

た。初級の教科書でよく扱われるような基本的なもの以外にもオノマトペが豊富にあり、様々なことが表現できることに驚く人もいた。

アニメやマンガというトピックが、「日本語学習」や「日本語教育」から遠いと感じられるかもしれないし、教師自身が詳しく知らないため、授業に取り入れることがためらわれるかもしれない。また、実際のアニメやマンガを使おうとしても、教材としては使いにくいということもあるかもしれない。しかし、ウェブサイトにはなかなか教師自身が表現できない絵や音があるし、既に情報が整理されているため、授業に取り入れやすいのではないだろうか。今回示したのは、サイトの中の素材のごく一部の活用例である。各教師が工夫し、様々な方法で「アニメ・マンガの日本語」が活用されることを期待している。

4. 「NIHONGO eな」 ：情報の提供と共有

4.1. 情報提供における教師の役割

インターネットの急速な普及とともに、だれでも無料で利用できる有益な日本語学習サイトやツールも数多く存在している。世界中の日本語学習者を対象に、これらをわかりやすく紹介し、学習に役立ててもらうことが日本語学習ポータルサイト「NIHONGO eな(いゝな)」の開発目的である。「NIHONGO eな」の名称は、インターネット上にある「これ、いいな」と制作者が感じたサイトやツールを集めて紹介するところから来ている。

サイト開発の目標の一つとした「わかりやすく紹介する」というのは、いろいろな国の学習者への調査から導き出したものである。日本語学習に関連したウェブサイトやツールの利用についてのアンケートやインタビュー結果から、オンライン辞書はよく利用するが、それ以外の学習サイトはそれほど使われていないことがわかった。あまり利用しない理由としては、どんなサイ

トがあるのか知らない、サイトを見てもどうやって利用したらいいかわかりにくい、などがあげられた。実際、筆者が所属する国際交流基金関西国際センターでも学習サイトを紹介する授業を行っているが、学習者は意外にサイトやツールを知らないという実感がある。そこで、「NIHONGO eな」では、具体的に以下の三つのポイントに配慮することとした。

- ① 紹介するサイトやツールで何ができるのかを簡潔に紹介する。
- ② 操作方法は、画像を多く使いながら紹介する。
- ③ 具体的なニーズに即してサイトやツールが選べるように、コンテンツ単位で紹介したり、具体的な活用方法を提案したりする。

この①および③の情報に関しては、日本語教師の経験や視点が大きな意味を持つ。

基本的に、ウェブサイトは学習者個人が自由に利用するものであり、利用する利用しないも含め、使い方や目的も自由である。しかし、調査結果から見て、ウェブサイトを利用してどんなことができるのか、何に使えばいいのか、すぐにはアイデアが浮かばない学習者も少なくないことが想像できる。したがって、どんな人が、どのような利用の可能性があるのかという情報を示すのは意味のあることであり、その情報を作成するには、日本語教師の経験や視点が重要となってくるのである。

教師として補足できる情報はいろいろある。たとえば、いわゆる初級学習者向き、中級向きといった日本語のレベルについての情報。話す、聞くなどの技能に関する情報。漢字、文法、語彙といった学習内容に関する情報を付け加えるだけでも、どのウェブサイトを利用したらいいのか、選びやすくなる。同じ文法というカテゴリーでも、説明中心なのか、例文が豊富なのか、ドリルが中心なのか、学習者が必要としている情報を抜き出して明示することも、日本語教師なら可能である。

また、教師としての経験から、一般向けのウェブサイト日本語学習用に活用するアイデアも出すことができる。自分の国を日本語で簡単に紹介するという活動は、比較的一般的なものかと思われるが、例えば、「NIHONGO e

な」では、「自分の国を日本語で紹介したい!」という記事を作成し、いろいろな国の情報が日本語で表示されているサイトを紹介していて、難しい文は「ルビ振り」や「辞書」のオンラインツールを利用することを提案している。

4.2. 情報の共有

「NIHONGO eな」の開発を通じて感じたことの一つは、インターネット上には非常に多くの有益なサイトがあり、また、使い方のアイデアもいろいろだということである。「NIHONGO eな」中でも、「覚えられない人のために」では語彙や漢字の覚え方についてインターネットを利用した例を集めたり、「みんなどうやって日本語を勉強しているの?」では異なる学習スタイルのウェブサイトをまとめて紹介するような記事も作成している。

しかし、限られた人数と時間で、それらすべてをチェックし、紹介することはできない。また、学習者からのインタビュー調査でサイトの使い方、例えば「Google」をどうやって日本語学習に利用するかなど、を教えてもらったように、ユーザー自身がいろいろなサイトを自分で工夫して活用していることも多い。

そこで、「NIHONGO eな」では利用者からサイトやツールを推薦してもらう「eな情報局」というコーナーを設け、そこに「これeな」と思うサイトやツールを紹介してもらうことにした。すでに寄せられた情報を基にして、新たな記事が複数作成されている。

デバイスや環境も含めて、インターネットはどんどん変化していき、新しい情報もどんどん増えていく。これは、日本語学習の分野でも同じであり、このような状況では、先に述べたように、経験を活用して情報を整理し、付加価値を加えて学習者に提供することも、日本語教師の役割の一つと言えるのではないだろうか。そして、それらの情報を効率的に共有することも重要になってくる。「NIHONGO eな」は、その一例である。

5. サイト開発の波及効果

5.1. 公開後の反響

インターネット・サイトの特色として、波及効果の速さと大きさを挙げなければならない。教室で対面する学習者数と比べると、それは計り知れない数となり、事業の影響力を考えると、非常に魅力ある点である。また、世界各地のユーザーから直接反応が声として届くことも多く、中にはよりよいサイトのための助言を寄せる者もあった。これら直接の反応ややりとりは、開発者にとっては予想外の喜びでもあった。

しかしその裏側には、学ぶ方教える方のどちらにとっても互いに顔の見えないバーチャルな場面での接触であるということも忘れてはならない。莫大な数のアクセス数と実際のユーザーの姿とを、どのように見極めるかは難しい課題である。そこで重要になるのは、教室活動で養われた教師の経験である。きらびやかな数値に振り回されることなく、実際に接触している学習者の顔を思い描きながら、ニーズや反響の意味を読み解く必要がある。

5.2. 教師の役割の変容

本稿では、三つのサイト開発の事例をもとに、教師としてどのように学習を支援することができるのか、ということについて考えてきた。三つのサイトはそれぞれ特徴を持っているが、いずれも開発者が「日本語教師」だったということが共通している。これはそれぞれのサイトの特色と無関係ではない。たとえば、「日本語でケアナビ」では、専門的職業に就くためには、専門用語だけを知っていれば、その社会で言語を運用していけるわけではないという主張を、外国人に対する日本語教育を行ってきた立場からコンテンツの中で訴えている。

また「アニメ・マンガの日本語」では、教科書にはのっていない「学習者が本当に知りたいこと」にいかに応えるか、どんなスタイルで情報を提供すればいいのか、その問いに対する一つの答えを具現化している。さらに、「

NIHONGO e な」では、インターネットというメディアを利用した学習スタイルの紹介、活用方法の提案とともに、新しい情報を加えながら、その情報を共有していこうという発想がある。

学習者にとって、教師は最も身近なインターフェースであるかもしれない。その役割を考えると、教室での学習支援者というだけでなく、別の側面からも学習者に関わる可能性が考えられる。たとえば、情報社会での学びの手法を提供したり、活用方法に対して助言することなどである。日本語教育を例として、外国語を学ぶことが知識構築だけで成り立っているのではないことを、身を持って知っている外国語教師にとって、「メディアとどうやってうまくつきあっていくか」という問いは、その役割への新たな展望を示唆するものではないだろうか。

それぞれの教師は、教室の中で学習者と向き合い、様々な工夫を凝らして授業を運営している。そこでのノウハウを共有しつないで活用していくためのメディアの一つが、インターネットであろう。ローカルな個人としての我々の利点、そして広くつながるメディアの利点をどう生かしていくかという問題は、もちろん一人ひとりの教師に問われている。

資料：各サイトの基本情報

1) 日本語でケアナビ

名称	日本語でケアナビ
URL	http://nihongodecarenavi.jp/ (スマートフォン用) http://nihongodecarenavi.net/sp
公開日	2007年4月1日
主な機能 / コンテンツ	看護や介護業務に携わる人のための日本語学習サイト。 日本語学習者だけでなく、学習者を支援するボランティア等も使えるように、日本語・英語・インドネシア語の多言語用語集として提供している。 ・8,000語(項目)余りを収録 ・約4,400の例文：初級で学習する文型による ・項目語と例文の音声データ ・介護の動作や器具などのイラスト ・文化紹介(日本、フィリピン、インドネシア)のコラム ・携帯モード(語彙検索に特化した簡易版) スマートフォン対応も(2012年4月)
言語(表記)	日本語(漢字使用)、英語、インドネシア語
ターゲットユーザー	外国人看護師・介護福祉士候補者およびその学習支援者等
利用状況	訪問者数(UU)：124,179 アクセス数(PV)：673,911 (2011年度)
関連教材・研究	・『外国人のための看護・介護用語集 日本語でケアナビ』(2009)国際交流基金 関西国際センター、凡人社 ・上田和子(2007)「看護・介護のための日本語教育支援データベース」開発調査をめぐって『国際交流基金日本語教育紀要』第3号、183-190 ・上田和子・田中哲哉・前田純子・嶋本圭子・角南北斗(2008)「インターネットサイトによる日本語教育支援—日本語でケアナビの開発と一般公開を事例として—」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号、169-176 ・上田和子(2009)ブログによるプロジェクト評価『国際交流基金日本語教育紀要』第5号、67-82
公開後追加した機能 / コンテンツ	・インドネシア語モード ・音声データ ・スマートフォン対応 ・漢字200(訓読み検索) ・クイズ機能 ・例文検索機能 ・カテゴリー検索

2) アニメ・マンガの日本語

名称	アニメ・マンガの日本語
URL	http://anime-manga.jp/
公開日	2010年2月1日
主な機能 / コンテンツ	アニメ・マンガに現れるキャラクターやジャンルの日本語表現を楽しく学べる eラーニングサイト <キャラクター表現> 「Character Expressions(キャラクター表現)」：約500項目 <ジャンル表現：4ジャンル展開(恋愛、学校、忍者、侍)> 「Expressions by scene(場面別表現)」：約900の台詞と約700のオノマトペ 「Word Quiz(用語クイズ)」：4000語 「Kanji Game(漢字ゲーム)」：400字+600語
言語(表記)	解説言語(日本語、英語)→中国語、韓国語、スペイン語、フランス語版(2012年4月) 表記(漢・かな、かな、ローマ字)
ターゲットユーザー	日本のアニメ・マンガが好きな、初級から上級までの幅広いレベルの、PCでインターネットを日常的に利用している日本語学習者(+日本語教師)
利用状況(月平均)	訪問者数(UU)：228,951 アクセス数(PV)：2,395,435 (2011年度)
関連教材・研究	・熊野七絵(2010)「日本語学習者とアニメ・マンガ—聞き取り調査結果から見える現状とニーズ—」『広島大学留学生センター紀要』第20号、89-103、広島大学留学生センター ・熊野七絵・川嶋恵子(2011)『「アニメ・マンガの日本語」Webサイト開発—趣味から日本語学習へ—』『国際交流基金日本語教育紀要』第7号、103-117、国際交流基金 ・「日本語教育通信 授業のヒント：アニメ・マンガを通して日本語を楽しく学ぶ」 http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/hint/201101.html(2012年7月30日) ・「日本語教育通信 授業のヒント：マンガでオノマトペ(擬音語・擬態語)を楽しむ」 http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/hint/201201.html(2012年7月30日)
公開後追加した機能 / コンテンツ	・部分公開方式で公開時は2コンテンツ。その後1年にわたり、毎月コンテンツを追加 ・場面別表現、用語クイズで台詞の音声、オノマトペの効果音を追加 ・多言語化

3) NIHONGO e な

名称	NIHONGO e な
URL	http://nihongo-e-na.com/
公開日	2010年4月1日
主な機能 / コンテンツ	・日本語学習に役立つ学習サイトやツールについて、概要、操作方法、使い方のアイデアを紹介する。 ・サイト紹介記事 180 活用方法の記事 60 (2012年3月31日)
言語(表記)	日本語(漢字使用)、英語 ⇒ 韓国語、中国語(簡体字、繁体字)と多言語化
ターゲット ユーザー	インターネットが利用できる日本語学習者
利用状況	訪問者数(UU) : 173,053 アクセス数(PV) : 1,018,768 (2011年度)
関連教材・研究	田中哲哉・浜田盛男・前田純子・角南北斗 (2011) 「インターネットを利用した日本語学習支援を広げるために－日本語学習ポータル『NIHONGO e な』の開発－」『国際交流基金日本語教育紀要』第7号、163-169、国際交流基金
公開後追加した 機能/ コンテンツ	・紹介記事 30件、活用方法の記事 20件⇒毎月更新し、現在は200件 (2012年4月) ・サイト内のフリーワード検索、サイトの多言語化

執筆担当：

- 1,2,5 上田 和子(うえだ・かずこ) 武庫川女子大学 教授
- 3 川嶋 恵子(かわしま・けいこ) 国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員
- 4 田中 哲哉(たなか・てつや) 国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員